

食事介助で介護学習会

食事の姿勢体験や

介護食の試食も

10月4日



実際に食事する姿勢を体験

介護技術研修として、食事介助について言語聴覚士を講師に研修を行いました。新入職員は必ず研修していますが、経験を積んでからさらに具体的に学習を深めるために、介護育成委員会が企画しました。

講師は、嚥下(えんげ)・飲み込むこと、その後、実際のミキサー座って体験しました。

と)のメカニズムや、食べる姿勢、ペースや環境など様々なことに注意が必要だと話しました。

車いすやベッド上での食事姿勢は、45度のリクライニングでは低かったり、首の位置も枕やクッションなどでやや顎を引き気味にしないと誤嚥の危険が高まることも自ら座って体験しました。

糖尿病教室を開催

血糖のコントロールを 継続することが大切

11月14日の「世界糖尿病デー」を前に、10月14日病教室を「糖尿病と認知

食やソフト食、きざみ食の比較試食でこんな状態なんだと驚いたり、ミキサー食とろみをつけたいお茶を交互に食事介助すること、口の中に残っていた食物がすりりと入っていくこと、一人ひとり障害をもつ部位や程度が違い、適切な対応

が重要であること、「だから、〇〇さんにはこの食べさせ方なんだ」と納得していました。

科学的裏付けに基づいて介護する。そして最終まで「食べたい」を応援したいと思います。

老健ちあき療養病棟
看護師 伊藤 祐子



市民公開講座とし、大勢が参加しました

患者さんの誤認を防ぐ

と安全研修

10月7日から6回にわたり安全研修会を開催し、延べ180名が参加した。患者さんの誤認は重大な医療事故につながる可能性があるため、

参加しました。今は大したことはないようでも、5年後、10年後に合併症(心臓発作、脳梗塞、腎不全、失明、四肢の切断)が出てはいけません。コントロールが大切とのお話でした。また、血糖降下治療を受けていない人では認知機能低下の危険が7割も増すと指摘されました。

大切なことは専門外来の受診と定期的な運動、食事療法と治療を継続することです。

外来看護師 河橋 直美



今回は、NST(栄養サポートチーム)における薬剤師の役割について紹介します。

薬剤師の消化吸収や薬剤の副作用のチェック

栄養管理が必要な患者さんの内服薬の使用に目を通します。最初に、投与されている薬剤によって、食欲減退がおきることはないか、胃障害がおきやすい薬剤が投与されていないかのチェックを行います。これは、薬剤により、食事摂取量がおちてしまい、栄養状態の悪化している患者



(栄養サポートチーム)



薬剤師の役割

食事と薬の相互作用や 経管栄養などに目配り

薬剤師 村瀬 知美

さんがいることもあるので、必要なチェック項目です。薬の副作用を理解している薬剤師の役割のひとつです。

輸液の栄養管理

患者さんの中には、

絶食中で栄養をすべて点滴で補っている方もいらっしゃると思います。点滴での栄養管理は、薬剤師が大きく関与するところでは、

点滴のみで栄養を補給する際、必要エネルギー

高カロリー輸液を使用する際、糖質・タンパク質は入っていますが、脂質が入っていないため、脂質の欠乏症が起きます。この時は、主治医に脂肪乳剤の使用を助言します。また、タンパク質の使用に関しては、肝機能・腎機能に障害のある場合、加えるタンパク質が異なるため、検査数値にも目を配ります。

経管栄養のフォロー

老健ちあきで「おでかけ」

いつもより

親密なふれあいも

10~11月



妙興寺ピアゴにて

老健ちあきでは、気分転換を図り、まち歩きを

楽しんでいただくために10月から11月にかけて外出企画を行っています。

外に出ると、利用者さんの顔がほころびます。同伴されるご家族とも、いつもより親密なふれあいもでき、楽しいひとときを提供できたこと、そして何より利用者の方々の笑顔が私達スタッフにとっての喜びにつながりました。

思い込みをなくするための工夫などを話し合いました。

みなさんも名前をのことに御協力下さい。

ひまわり病棟看護師
クラウリー 由実子

がりました。

博物館では、写真や土器、織機などの展示を見ながら、昔の話などスタッフに熱心に語ってくれたAさん。喫茶店では、「昔からよくモーニングに行っていたから懐かしい。また行きたいね」と笑顔いっぱい答えてくれたBさん。普段はあまり話さないCさんが、喫茶店ではたくさん話して下さいました。この貴重な時間をまた作っていきたくです。

老健ちあき 介護職
山本 亨